



## 2014年も実施! 東京マラソンで継続するボランティア活動

photo: 編集部

## Interview

岩元健朗

## ベッド3床から始まった

— 東京都鍼灸師会では2010年から東京マラソンでボランティアブースを構え、ランナーへのケアサービスを実施しています。活動に至った経緯を教えてください。

岩元 2008年、東京マラソン財団の事務総長を務めていた佐々木秀幸先生に、当会新宿支部の高岩吉男先生を通じて当会小松秀人先生が参加の

申し出をしたのが始まりです。2009年の大会を視察し、医療救護委員会委員長の山澤文裕先生のご高配でメディカル部門も見学しました。佐々木事務総長には「まず10キロ競技のフィニッシュ地点で活動して実績を積んでください」と言われ、2010年からフィニッシュ地点である日比谷公園にテントを張ってベッド3床から始めました。このときは東京都鍼灸師会の理事が中心となり、スタッフを一般公募することなく行いました。新宿シティハーフマラソンで活動実績がある新宿支部の井坂卓司先生、申英秀先生にも手伝っていただきました。

ボランティアへ参加するにあたり、大いに活躍したのが小松先生作成のマニュアルです。施術はバイオネックスのみ、手指のグローブを着用し、消毒衛生、安全性に留意していることも明記しております。これによりドクターの承認も得られ、活動できるようになりました。マニュアルやカルテは、大阪や神戸のマラソン大会での各師会の活動にも活きています。2015年から神奈川県鍼灸師会が横浜マラソンでのボランティアに参入予定ですが、その参考になるでしょう。

——スタッフ数とベッド数はどう変わりましたか。

岩元 2010年と2011年は10キロフィニッシュ地点の日比谷公園でベッド3床、スタッフは2010年が11人、2011年が10人です。2012年からフルマラソンのフィニッシュ地点である東京ビッグサイトでの活動が認められ、スタッフは54人、ベッドは12床に増えました。2013年は53人、ベッドは12床、2014年はスタッフ69人、ベッド20床でした。2014年からは東京都鍼灸師会スポーツボランティア専任の理事を置き、藤井伸康先生が中心となり運営を行いました。

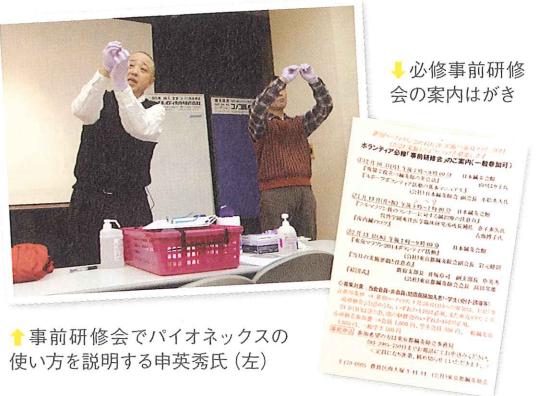
2012年から東京都鍼灸師会の会員と一般の鍼灸師にも公募してスタッフ数を増やし、事前研修会を実施しています。内容ははがきで会員に案内するのですが、会員の他に非会員、学生を募集する旨を書いていますので、会員から一般の鍼灸師に伝わります。2014年は研修後、会員27人、一般38人、学生4人の計69人が当日参加しました。

## ボランティア活動マニュアルの主な内容

- 大会概要
- 活動場所の案内図
- 準備品付け、注意事項
- スタッフ構成
- 施術内容とプロセス
- カルテ記入方法
- 施術禁忌箇所
- ランニングパンツ使用のランナーへの注意
- 手指消毒、グローブの着用
- 施術野の消毒
- 施術部位は疼痛部位あるいは違和感など
- バイオネックスの使用方法
- 施術後、施術部位を記録したランナー用カルテと外皮消毒剤を渡す
- アンケート実施



↑ 東京マラソン財団元事務総長の佐々木秀幸氏（前列左）、高岩吉男氏（前列中央）と東京都鍼灸師会理事（photo: 小松秀人氏提供）



↑ 事前研修会でバイオネックスの使い方を説明する申英秀氏（左）

研修会ではバイオネックスによる施術方法、アイシング、マラソンランナーによくみられる障害、消毒衛生に関して講義、実技をします。2014年は3回実施し、研修会に最低2回出席することをボランティア参加の条件としました。最後は結団式をして研修会の修了証を渡します。

## 回を重ねるごとに修正する

——2014年は外国人ランナーの利用が例年よりも多く見受けられました。その他、今回の特徴をお聞きください。

岩元 東京マラソンは2013年からワールドマラソンメジャーズに加入し、外国人ランナーが増えることは予想していました。ですので、2014年は事前研修に英会話の講義も加えました。呉竹学園の山川より子先生に講師をお願いし、山川先生作成の資料



外国人ランナーの  
対応をする  
山川より子氏

©東京マラソン財団

「鍼灸師の英会話」で読み合わせもしましたが、当日々山川先生や英語が堪能なスタッフに頼る場面が多くかったです。スタッフアンケートの反省点に英会話のスキルは必須だと痛感したことを記入した人もいます。外国人ランナーの利用が増えたのは、財団が用意した「ラン・ツボはりケアステーション」の案内板の下に「Acupuncture Care Station」の英語表記が加わったことも要因のひとつかもしれません。

——ベッドが20床に増え、利用者も増えましたが。

岩元 739人のランナーが受療しました。2013年が412人でしたので、約1.8倍ですね。今回は財団に用意していただいたブースの場所が、ランナーが立ち寄りやすい導線にありました。フルマラソンを終えたランナーはトラックで運ばれた着替えなどの手荷物を受け取り、更衣スペースに移動するのですが、これまで少し奥まったところに設置されていたブースが、今回は更衣スペースのすぐ横に設置されました。呼び込みをしなくとも次から次へとランナーが入ってきました。また前回は1床を3人1組で構成し、1人が施術、1人がアシスト、1人が誘導を担当しましたが、今回は1床2人1組にし、施術担当は待機施術者と交代して休憩しました。人数が足りないのが理由ですが、2人1組のほうがスムーズですね。

### 事故を起こさないことが前提

——今後改善したほうがよい点はありますか。

岩元 毎年、ピーク時には待合の椅子もいっぱいになり、さらに長い行列ができます。お待たせしないように、施術時間は1人15分以内と決めていますが、施術担当によってバラツキが生じます。フルマラソンのあとは症状があちこちに出るので、どうしても治療になってしまいますね。この活動はその症状のすべてを治療することが目的ではなく、その日のランナーの一番つらいところをケアし、翌日の疲労を軽くすることです。施術スタッフには時間をかけすぎないことを理解していただきたいです。また、施術箇所は多くても6カ所にとどめると決めていますが、ベテランの鍼灸師ほどバイオネックスを使う数が多いようです。ランナーの要望に応じたのかもしれません。今後は徹底したいと思います。

——今回、最も大変だったことは何ですか。

岩元 休憩時間がなかったことですね。これはスタッフのアンケートにも多くみられた意見です。休憩する際は待機施術者と交代してよいのですが、対象者数が多いので、実際は休んでいられません。休憩なしで4時間、5時間の活動は体力を消耗します。この点も改善したいと思います。

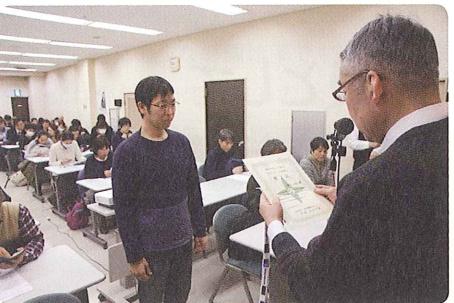
終わったあと、疲労感はありますが達成感はなんともいえないものです。今回参加したスタッフには、今後も継続して参加してほしいと思います。

——マラソン大会での活動で最も注意しなければならない点は何でしょうか。

岩元 どのような症状なのか、私たちの施術の範囲にあるのかを鑑別することが重要です。今回は蜂窩織炎のランナーがいたという報告を受けています。受付で確実に把握し、救護のランナーが発生したらブースリーダーとボランティアリーダーに報告し、緊急医務室へ搬送しなければなりません。とにかく事故を起こさないことが肝心です。

### 岩元健朗（いわもと・けんろう）

1964年、京都府生まれ。87年、明治鍼灸大学（現明治国際医療大学）鍼灸学部卒。89年、東京医療専門学校柔道整復科卒。91年、同校教員養成科卒。ケアマネジャー、介護予防運動指導員。岩元鍼灸院接骨院院長、東京医療専門学校講師。公益社団法人東京都鍼灸師会副会長、公益社団法人日本鍼灸師会研修委員、同会鍼灸臨床研修会講師指導員。



↑研修会修了証は東京都鍼灸師会会長の高田常雄氏が授与

### 当日のミーティング



↑他に東京都柔道整復師会によるボディケアや企業による足湯も設置されていた



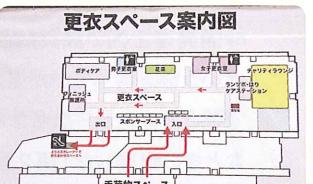
↑ベッド20床はすぐに埋まった。奥に女性専用のスペースもある

### PHOTO REPORT

photo: ©東京マラソン財団

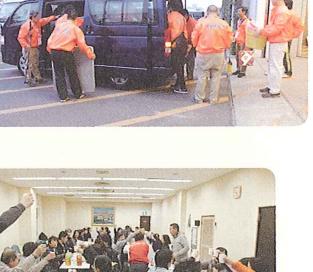


↑受付を待つランナーの行列



↑案内図

↑ランナーを案内する井坂有杏氏。若手の中心的な役割を果たしていた



↑フィニッシュ後のランナーがブースから見える

↑荷物はワンボックスカーに積んで撤収

↑解団式。乾杯!